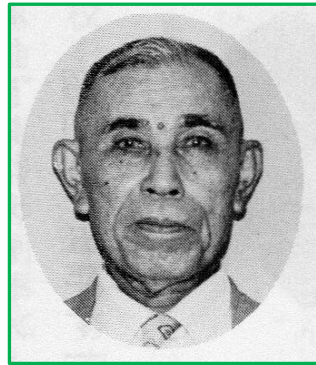




～第29号からのつづき～

◇ あこがれの「金ボタン」の制服を着られない

せっかく苦勞が実って合格したのに、金ボタンの制服に袖を通すことができませぬ。それは、その年に専門学校の卒業生が多く入ってきたので、雇用試験に合格しても金ボタンの制服を着ることができなかったのです。専門的な学問と技術を学んで入って来た専門学校の卒業生から順に責任の重い仕事に就かせたのです。悔しさを滲ませた武彦さんは…



1 よし、それなら…

武彦さんは決心しました。「よし、それなら専門学校よりも上級の『東京鉄道学校』に入ろう。そこに入れば鉄道や交通のことを、専門学校よりも更に詳しく学べる。高度な知識と技術を身に付ければ、責任のある大事な仕事を任せてもらえるだろう。よし、自分ももっとがんばるぞ。」

こう決心した武彦さんは大正12(1923)年、今から93年前に鹿児島を離れ、一人で東京に向かいました。

2 東京横浜電鉄(現在の「東急電鉄」)に入社

東京に出た武彦さんは、仕事をして生活費や学費をかきながら東京鉄道学校で真剣に勉強を続けました。苦勞に苦勞を重ね、昭和元(1926)年、東京鉄道学校を卒業すると、身に付けた鉄道や交通に関する専門的な知識と技術を生かして「東京横浜電鉄株式会社(現在の東急電鉄)」に、いきなり技術主任として入社することになったのです。

この時、武彦さんは26歳。田検尋常小学校の卒業後、田検補習学校に入り、仕事をしながら夜はランプの明かりを灯して勉強を続けていた武彦さん。夢であった「大和(内地)に出てもっと勉強をする。そして技術を身に付け、一人前の仕事ができる大人になりたい」が、まさにこの時に現実となったのです。

島(田検)を出て7年、つらい苦しみにも決して負けることなく、ねばり強い努力によって立派な鉄道技術者となり、東京の一流の鉄道会社で働くことができたのです。田検に住む親や福行じいさん、そして集落のみんなも、この知らせに大喜びし、武彦さんが立派に活躍してくれることを祈ったにちがいません。

3 島に役立つ技術を

鉄道技術主任としてまじめに黙々と仕事を続け、会社の上司や同僚からも高い評価を得てきた頃、武彦さんの心の中で一つの思いがふつふつとわいてきました。「もうじき、島のおじいは年をとって働けなくなる。おかあも一人ではたいへんだ。長男である自分が島に帰り、おじいやおかあの面倒を見なければなるまい。島には鉄道はないので、自分の鉄道技術は役に立たない。島に役立つ技術が必要だ…。」

島にとってどんな技術が必要になるか…、武彦さんは、鉄道の仕事の合間に島のことを思い出しながらいろいろと考え続けました。

「鹿児島や東京には、鉄筋コンクリートの建物が造られている。島にもこんな建物があれば、台風で吹き飛ばされることもないだろう。そうだ、島にとって台風に強い家を建てる技術が必要だ。よし、建築技師だ。」

4 鉄道技師をしながら大学で建築技師の猛勉強

一度決心したら絶対にうしろに引かない性格の武彦さんは28歳の時に、東京芝浦工業専門学校建築科(現在の東京芝浦工業大学)に入学。昼間は東京横浜電鉄で鉄道技術主任として仕事をし、夜は大学の建築科に通う学生になったのです。

昼間の仕事を終えるとすぐに大学へ。むだな時間などまったくありません。仕事を終えた後の夜の勉強は想像以上にきつく苦しいものでした。しかし、

「島に帰る。島に帰って台風にも負けない家を建てる」その一心で、疲れた体にむち打ってがんばり抜く毎日でした。その甲斐あって優秀な成績で卒業しました。

建築技師の資格を手にした武彦さんは、鉄道会社を辞め島に帰る決心をしたのです。昭和4(1929)年、武彦さん29歳。10年ぶりに島の土を踏みました。

5 島で建築技師としての一歩 ～国立療養所建設～

幾多の苦勞を乗り越え、たくましく成長して帰ってきた武彦さんを家族はもちろん島のみんなは大喜びで迎え入れました。「島んため、ただかきばらばいきやん。」と決意を新たにし、昭和5(1930)年7月、鹿児島県大島支庁の建築技手に任命されました。念願だった「島出身の建築技師」として喜びの一歩を歩み出したのです。

昭和14(1939)年、奄美大島にハンセン病の国立療養所が置かれることになり、奄美市(当時は名瀬市)の有屋地区(現在の和光トンネル近く)に建設されることが決まりました。武彦さんは敷地の測量、建物の設計、建築現場の監督などすべての担当責任者でした。

しかし地元の人々は、当初、国立療養所の建設に反対しました。測量調査に来た建設担当者が地域のひとびとに囲まれてしまうこともあり、(つづく)